大連神社

大連神社　宮司　水野大直

大連神社をご存じですか

下関市阿弥陀寺町、赤間神宮の水天門をくぐり石段を上がると拝殿が見えます。そこから境内を東側に歩くと東部第一地区の氏神様・鎮守八幡宮があり、やがて大連神社という看板が見えてきます。これを見た参拝者は「大連神社」ってなに？と不思議に思う方が大半のようです。もとは中国の遼東半島、満州の玄関口・大連に建てられた神社なのですね。その大連神社がなぜここにあるのでしょうか？少し振り返ってみましょう。

大連神社は日露戦争の終結直後、ポーツマス条約により遼東半島の租借が成るや、当時の出雲大社宮司にして大社教管長たる千家尊福翁の命を受けた松山珵三師により、大社教大連分祠として明治四〇（一九〇七）年八月に建立されました。

明治四二年に大社造りの立派な社殿が竣工し、四三年には社号を大連神社とし大連三十万市民の総氏神として鎮座しました。御祭神は天照大神（伊勢神宮）・大国主神（出雲大社）・日露戦争に従軍戦死した英霊を靖国神と仰ぐ三柱の神で、後に明治天皇も祀られました。

現・大連神社

やがて松山師は妹婿水野直蔵に宮司を譲り、自身は産霊（むすび）教を創始して布教に専念しました。直蔵宮司は新たに神明造りの社殿を建立するなど境内整備に尽力、昭和九年その直蔵を継いだのが六男水野久直でした。久直宮司は雅楽を重んじ同一四年には大連舞楽会を創設、当時の宮内省楽部と同様の舞楽装束一式と大太鼓一対を整え翌年の紀元二千六百年祭を賑々しく執り行いました。正月初詣はもとより春秋の大祭も大変賑わい、市民の心の拠り所と親しまれたものでした。ところが昭和二〇年八月終戦を迎えるや情勢一変、九月にはソ連軍の進駐という危機に瀕し、食べるにも苦労する売り食い生活を強いられます。引き揚げもままならぬ中、言葉の通じぬソ連兵を「音楽なら通じるのでは」と雅楽でもてなし、漸くソ連軍司令部の理解を得て神域を護持し得ました。その後久直宮司は大連神社御霊代、御神宝を奉持して高砂丸に乗船し帰国、時に昭和二二年三月のことでした。

大連当時の姿

佐世保に上陸後、福岡市の筥崎宮に御霊代を仮遷座し、幡掛宮司の配慮により翌年一月三十一日、久直は赤間神宮宮司に任ぜられましたが、本当の苦労はここからでした。戦災で焼失し何もない境内から鋭意復興に努め、本殿・拝殿・水天門など現在の社殿が竣工。その傍ら、境内に一社を建立して筥崎宮より大連神社御霊代を遷し仮殿としました。

その後、改めて隣接土地を得て、長府の貝島太市邸より日の本神社を拝受して移築し、昭和五五年五月全国大連氏子の奉賛によって復元、現在の「大連神社」として鎮座しました。

戦前外地にはたくさんの神社が建立されましたが、戦後内地に戻ることが出来た神社はただ一つ大連神社だけなのです。それが下関にあるとは不思議な御縁ですね。今も春と秋には大祭が執り行われ、全国から氏子崇敬者が集いますと当時の思い出話が尽きません。水野直房名誉宮司も大連生まれの一人です。しかし大連で生まれ育ち、華やかなりし頃を知る方はさすがに少なくなってきました。これからは地域の皆さんにも協力いただいて共に語り継いでほしいと思います。

現在の大連は開発特区の都市として物流、産業、技術が集積し、また服飾産業の拠点となりファッションショーも行われるなど飛躍を遂げています。広場を中心とする美しい町並みなどを観光に訪れる日本人も多く、市民も親日的であり、日本企業も多数進出しています。大連神社には中国から来日の方も参拝に来られ、日中友好の接点ともいえましょう。

近年、神社の御朱印を受ける方がよく訪れますが、大連から持ち帰ることが出来たものの一つに御神印があり、今でもご希望の方にこれで御朱印を捺しています（赤間神宮の御札所で受付）。森林浴をしながら参道を歩いても気持ちよく、健康長寿の御神徳あらたかといわれる大連神社、どうぞお参り下さい。